

三年ほど施設に入所していたお檀家さんが亡くなりました。私が急いで伺い読経していると、高齢の奥さんが「あら、おじいさんの目が開いた」とおっしゃいました。ご主人はコロナ禍前の施設入所でしたが、次第に面会制限が始まり、それ以降お互いのぬくもりを感じながら見舞うことは叶わなかったそうです。亡くなって、ようやく手の届くところに帰ってこられたご主人。お経を聞きながら、奥さんがご主人の目が開いたと感じられたのは、不思議ではないように思いました。

また、山間にお住まいの高齢のご夫婦の話です。ご主人が病気で入院し、病院で亡くなりました。葬儀を終えご主人を見送った奥さんは、さぞ悲しみや寂しさでいっぱいであろうと案じていました。ところが初七日も終わった頃、奥さんは「入院中は毎日寂しかったけれど、亡くなってからはいつも私のそばに主人がいるのでぜんぜん寂しくありません」と話されたのです。

あれから月日は経ちましたが、いつお邪魔しても仏壇にはお膳や、お菓子、果物などにぎやかにお供えされています。畑の作物や季節の果物など、お供え物の一つ一つからご主人に話題が広がります。「在ますが如く」仏壇のご主人に声をかけながら、奥さんが煮しめなどをお供えする姿を見ると、結婚されてから永い年月を共につづってきた「夫婦の有りよう」を教えられます。

長年連れ添いながら、数年別々の屋根の下で過ごすことになった二組のご夫婦。これからは、亡くなってやっと帰ってきたご主人を身近に感じながら過ごされると思います。私も一緒にご供養を重ねていこうと考えています。